



2009年11月11日放送

漢方頻用処方解説 黄連解毒湯①

慶應義塾大学 漢方医学センター 今津 嘉宏

主な効能

黄連解毒湯の主治は500年頃に葛洪（かつこう）が編纂した『肘后方（ちゅうごほう）』に、「熱極、心下煩悶」熱極して心下部が悶え苦しみ、「狂言鬼を見」熱が高く煩躁状態になってうわごとを言っている。現実には存在しないものを見た。幻視というのか、頭が錯乱して鬼がいると言い、「起走せんと欲す」起き上がって走ろうとする。非常に高熱のために中枢神経がやられたような状態で「煩嘔」悶え吐き、「眠るを得ざるを治す。」とあり、顔面紅潮、のぼせ、頭痛、不安、イライラ、心悸亢進などがあり、ときに鼻出血や下血その他の出血を伴うもの。高血圧症や更年期障害の場合は、心窩部つかえ感、抵抗と圧痛を伴うことが多い。発疹、かゆみなどの皮膚症状やびらんなどがみられるものに用います。

原典

この処方の原典は、『外台秘要方（げだいひようほう）』になります。8世紀の中国で唐王朝の役人であった王燾（おうとう）が752年に唐代の医学書を整理編集し全40巻、104間にまとめたものです。この1巻の傷寒門上に黄連解毒湯があります。黄連解毒湯はもと『崔氏方（さいしほう）』巻1に記載されていた処方で、「ある前の軍督護の劉車と

いう人がはやり病にかかって3日、発汗治療で治った。しかし酒を飲んだため、また劇しく苦しみだし、もだえ苦しみ、からえずきし、口が渴き、うめき声を上げ、錯乱状態の症状が現れ、横になることもできない。そこで黄連解毒湯を一服するともうろうとした目つきがはっきりとしてきて、もう一服して粥をすすり、しばらくして治った（意識）。」と記されています。

高熱を発してもだえ苦しみ、吐き、非常なうなり声を上げて間違っただけを言う、眠れないような状態に用います。また、必ずしも酒を飲んで酔った時だけではなく、様々な精神障害を伴う症状に有効です。

構成生薬

黄連解毒湯は黄連、黄芩、黄柏、山梔子の四つの生薬で構成されています。

黄連という植物はキンポウゲ科のオウレン属です。この地下部の根茎を薬として使用します。これを折ってみると黄色い色をしています。この黄色がベルベリン系アルカロイドです。日本薬局方ではこのアルカロイドが3.5%以上含むものとされています。『神農本草経』の上品に収載されています。上薬すなわち不老長生薬というわけで、「黄連の味は苦く寒で、熱気の日痛、眚傷の泣出（きゅうしゅつ）を主り、目を明らかにし、腸澼の腹痛や下痢、婦人の陰中腫痛を主る。」とあります。また、『薬徴』には「心中煩悸を主治する。」つまり、胸の中が熱っぽくて動悸がするという状態で「心下痞」胃がつかえて「吐下」吐いたり下痢したり「腹中痛む」お腹が痛むもの「を旁治する」と書いてあります。

成分はberberine, coptisine, jateorrhizine, palmatine, worenine, magnoflorineなどのアルカロイドの他に、葉中エタノール成分としてフラボン配糖体のcoptisideが含まれています。作用としては、抗潰瘍・胃液分泌作用、抗炎症作用、抗菌作用、血圧降下作用などがあります。

黄芩は、『神農本草経』の中品に記載されています。コガネバナという植物の根のコルク層をのぞいて乾燥させたもので、成分はwogonin, baicalin, croxylin-Aです。『薬徴』には「黄芩の主治、心下痞なり。旁（かたわ）ら胸脇満嘔吐、下痢を治すなり。」とあります。

黄柏は、ミカン科のキハダの幹の皮を乾燥させたもので古くから健胃、整腸生薬として用いられます。下痢止め、整腸薬、食中毒に用いられる様々な製剤に配合されています。成分としてはberberine, palmatineなどの非アルカロイド化合物と高級脂肪酸、ステロイド化合物などの脂質成分を含みます。作用としては抗菌作用、抗炎症作用があります。

山梔子は『薬徴』に、「心煩を主治するなり。旁（かたわ）ら発黄を治す。」とあり、胸苦しいものを治し、黄疸を治すとあります。山梔子の成分はカロチノイドの一種であるcrocinの他に、nonacosane, β -sitosterol, mannitol, geniposide, gardenosideを始めとするイリノイド配糖体があり、作用としては鎮静、消炎、利胆、解熱、止血、利尿、消化系に対する作用を認めます。

これら4つの生薬を合わせた本方は、三焦の実火つまり全身の炎症に対して用いる処方です。

古医書の記載

浅田宗伯（1815-1894）は『勿誤藥室方函口訣』において、「この方は、胸中熱邪を清解する聖劑なり。一名倉公の火劑とす。その目的は梔子鼓湯の証にして熱勢激しきものに用いる。」とあり、黄連解毒湯は胸郭内の熱邪を解熱および解毒する働きがあります。別名を漢代の名医倉公の火劑といい、梔子鼓湯の証を使用目標として、熱の勢いが激しいものに用います。「苦い味に堪えかねるものは振り出しの薬を与えるべし。大熱ありてひどく下痢するもの、あるいは痧病などの熱毒深く洞下するものを治す。また、狗猫鼠（くびょうそ）などの毒を解す。」苦みが堪えられないものには振り出しで与え、熱があつてひどく下痢するもの、あるいはコレラなどの病気で熱が体の奥にあり下痢するものを治す。犬、猫、鼠などの毒を解す。「また喜笑とまらないものを治す。これまた心懊悩するものなすところなればなり。」また、笑いが止まらないものなどの胸の中が何とも形容できないように苦しいものを治す。「また、酒毒を解するに妙なり」また、二日酔を治すとあります。

『病機彙編（びょうきいへん）』には、「黄連解毒湯、咳して喘息し、面赤く潮熱あり、脈洪大（こうだい）を治す。」とあり、『万病回春』（1587）には、「黄連解毒湯。傷寒熱症、医誤つて姜桂（きょうけい）などの薬を用い、火邪を助起し、相打つてあい逆するものを治す。」とあり、傷寒の熱が高いときに生姜、桂枝など、使つてはならない薬を使つて非常に状態が悪化した場合に黄連解毒湯を使うと良いとあります。

和田東郭（1743-1803）の『蕉窓方意解（しょうそうほういかい）』には、「半表半裏の熱でもない、すなわち小柴胡湯あたりが行くような熱でもないし、また、石膏、知母、麦門、粳米のたぐいで熱を冷まして、そして乾燥しているのを潤すという風な場合の熱でもなく、また大黄とか芒硝で効をとる消化管の実している熱でもない。この黄連解毒湯の的になる症状というのは、数日をかなり経て、俗に残余の余熱などという熱であつて、体の表の方にはあまり熱がなくて、底力が強くて、しぶとい熱を目標にした方がよい。これを名づけて古びた熱という（意識）。」とあります。